

紹介

塩

窟

桜

— 堅田郷に多い早春の花 —

会員 深 矢 勘 藏

春の彼岸のころ、陽気のたゞよ、堅田路をさかつかつぼると、右の山裾、左の村中は、点々と咲きほころぶすてに満開の桜が眼に映る。

山桜と殆んど時を同じく、しかた方ばんた奈ことごとく真白に咲き、山桜と同じように葉が花より先に開き美しく、葉まで美しい一へ淡で美しい一へで塩窟桜と呼ばれている。毎年三月下旬には満開である。

この桜の分布を尋ねて、市中から佐伯大橋・中山トンネルを過ぎて陽春の堅田路をたどると、まづ泥谷ねいごの日野邸、植込木の中から道路にのし出たように咲いている桜が眼に入る。これが堅田郷塩窟桜の第一号である。

目通り一米四十種余で、樹令は若いが県道側に枝を張り、郵便局側の下木が依られているので、これからの枝張りが楽しまれる樹である。

ここを過ぎると、路は俗に越野の淵と呼ばれる河岸に出る。そこから右手川向う、佐土原部落の山裾を望めば、三軒ばかりの民家の上には、黒々とした林から樹け出して、あたかも傘をひふげたように咲いている桜が見える。青い淵、黒々と茂る樹々、そって満開の桜のとり合せは、すばらしい眺めである。

訪ねて行つて見るとそこは墓地で、享保十年(一七二五)の年争の刻まれている墓も交る古墓地、この桜は河野の頃ここに植えられたものであろうか。目通り二米余の巨木で、かなり若朽していてもまことに氣息奄々といった姿は痛ましい。

次は左手、波越なごの墓地の桜である。県道を少し進んだ大正区の入から、満開の全貌が目に見える。鎮守の森の常楽寺の中間、墓地の一角にどっぴりと根をよけている。幹は根廻りは約六米位もあり、二米ほどの高さから数本の太枝に分れ、三メートル程の墓地を大小の枝が覆うような格好で、幹に生えた宿う木と見ても、相当の年数を経ていることが知られる。

それから曲折して続く県道を行くと、左手に市の文化財「石打の大地蔵塔」と「佐伯惟治父子の塔」などいもゆる石打のお塔、古手川とへたてて千代鶴の悲劇と物語る西野のお塔があり、このあたりは世史跡の中心地である。

府坂・竹角を過ぎて道は市福所いちふくに入る。古い歴史を秘める潜龍塔のある岡の端に、寸なると伸びた桜が一本これだけ目通り一米ちよつとばかりの稚木で、幹が三本におかれ、樹形は艶やかで楽しみな木である。尚部落の奥にも一本同じように花を咲かせている樹がある。

市福所を過ぎて、道が崖ぶちを廻るところ、川向うに三角洲のように広い芝原がある。馬鏡神社の競馬場の跡であるが、その山際に二本の桜が好を競っている。

これは、大正三年競馬場建設記念に植えたと伝えられているので、樹令六十年度である。大きい方は、すでに周囲三米七十種余に成長し、樹勢旺盛、堅田にあるこの種の桜の中で、随一の樹冠を形成している。いま一本

は一米八十程位で樹勢は劣るが、二本揃って咲き乱れる様は、対稱の画を見るようである。

この花を左に眺めながら、川にそうして迂回する路は、大通り区で左右に分れる。左はまづ直に谷川・山口を経て裏峠を越して蒲江に行く道。右手に川べりを伝へて黒沢の部落で、三軒ばかりで桜の東光庵に達する。有名な桐が原の塩竈桜のある所である。明治の文豪岡本独歩の日記に書かれ、佐藤鶴谷が紹介し、明治時代は石丸紫水が「郷土唱歌」に歌いこんだ桜である。

独歩が観たもの、鶴谷の筆口のつた桜は、大正八年三月に倒れ、今はその根元を囲んだ石圍によつて、当時の大樹の姿を偲ぶばかりではない。

幸いその間いの中は二代目が成長し、既に一米八十程ばかりの周りを示している。

もう一本は、高さ五米位の所から朽ち折れたが、そこから新芽が出て、根を垂らして根上りのとうな姿になり、すでに幹周り三米七十程程の珍らしい樹形となっている。

二本共大木であり、樹冠も見事、そして歴史物語もあつて、場所はよし、依然堅田塩竈桜の王座にあると言えよう。この二本が毎年庵の前庭と覆うて咲き乱れる様は、昔の姿を彷彿させる眺めである。平原の桜を野趣豊かと思はれ、これは雅致の極みとでも評されるであらう。

この東光庵の桜をゆつくり觀賞し、名残りを惜しむつ再び大通りに引返せば、青山小学校の校庭に、若木の桜が一斉育ちはじめ、花をつけていることに気がつく。これは塩竈桜である。

ここから右折して県道をニキロばかり進むと、道は谷川と山口の境の淵に沿うてカーブする。

そこで左手に目を移すと、尾ノ墓地にある桜が見える。

この樹も目通り二米八十程余の大木であるが、手入する人もないのか、太いがずらの巻くにまかせ、年々花が少くなるに近所の人は話していた。なお、むかしからこの近在の人たちは「いもふせ桜」と呼んで、この桜が咲くと、種いもをふせぬ農作業の目途にしていたといふことである。

右のように、大小十本程の桜が、堅田に春の訪れを告げていた。

これらの桜も、日野邸や東光庵のように、庭にあるものの外は、手入れも悪く、樹勢に衰えが及られるものが半数以上あるのは、惜しいことである。

私は、堅田の風物詩をおりなすこれらの桜を大切にしたい。この思いと行動に移すとすると、他人の所有のものがあるため、さしやわりというか、何んとなくごたわりがある。それぞれ、かかわりのある人の関心を呼びさます外ないであらう。

(附)

提内の「東光庵の桜」

放生町提内の神社の境内には塩竈桜が一本あつて、春毎に美しく咲いて村の人達を喜ばせているが、その桜を「東光庵の桜」と呼んでいるという。つまり何十年前、話か黒沢の東光庵から苗を持ち帰つて植えたからであるとのこと。面白い話である。

（同地五十川会員からの聞き書）